

L・ケイムズにおける「富裕な商業社会」の問題

小柳, 公洋

<https://doi.org/10.15017/4491792>

出版情報：経済学研究. 54 (4/5), pp.17-29, 1988-12-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



L・ケイムズにおける「富裕な商業社会」の問題

小 柳 公 洋

は じ め に

L・ケイムズほどスコットランド啓蒙思想家のなかで多方面に多産的な著作を残した人は少ない。かれの本職である法律・法学の分野を嚆矢として哲学・倫理学・宗教・教育・経済・文芸等にわたる広範囲の領域に足跡を残している。現代流に云えば、マルチ型人間として才能を発揮した一人である。しかもただ単に学問・研究分野における、言ってみれば、書齋における人ではなくて、法律家としては法実務の実践家であり、熱心なスコットランド経済社会の改善運動家であり、啓蒙を担った数多くの天才的人々の相談役的存在でもあった¹⁾。W・レーマンは、ケイムズのオリジナリティないしプライオリティは、もちろん種々の分野におけるそれまでの理論や観念を拡充、発展させた点にみることができが、なんといっても、法分野におけるかれの業績であった、という。D・リーバーマンや田中正司教授も、1750年代のケイムズの活躍期、つまり51年の『道徳および自然宗教の諸原理』から62年の『批評原理』の時期の法学にお

ける業績に分析の重点をおいている²⁾。この時期の法学研究の代表的成果である58年の『法史論文集』、60年の『公平法原理』において方法論的に極めて明瞭な特徴がみられるのである。簡単にいえば歴史的方法ということになる。事物の真理性を歴史的に把握し、理解しようとする態度である³⁾。この歴史的方法はかれの法学研究のみでなく、その他の領域での知的営為の成果においても貫ぬいていた。また、この方法はケイムズ独自の方法ではなくて、スコットランド啓蒙の人々に共通した学門態度でもあった。かれらの歴史観・歴史理論に興味をもつ者にとっては、『法史論文集』や『人間史素描』は、ケイムズにおける「歴史的なもの」を考察するのに、格好のものといつてよい。中でも、後年のケイムズの大著『人間史素描』は、I・ロスによると、それまでのケイムズの思想的、理論的営為の総括的性格をもつ、といわれている⁴⁾。そ

1) William C. Lehmann, *Henry Home, Lord Kames, and The Scottish Enlightenment*, The Hague, 1971, p. 286. 田中秀夫, 「ケイムズ卿におけるユートピアと改革」, 田中正司編著, 『スコットランド啓蒙思想研究』, 北樹出版, 1988.

2) David Lieberman, The legal needs of a commercial society; The Jurisprudence of Lord Kames, in *Wealth and Virtue*, eds. by Hont and Ignatieff, Cambridge U. P., 1983, P. 204. 田中正司, 「ケイムズとスミス——ケイムズ法学研究序説——」, 神奈川法学, 22-3, 同, 『アダム・スミスの自然法学』御茶の水書房, 1988, 第1編第2章。

3) L. Kames, *Historical Law-Tracts*, the fourth edition, 1792, Edinburgh, P. III, PP. 429-30. 田中正司, 前掲論文および前掲書。

4) Ian S. Ross, *Lord Kames and The Scotland of His Day*, Oxford, 1922, P. 337.

ここで、本小論では『人間史素描』を中心に分析の歩を進めたい。

1. 商業社会の陥穽

少し長いが、まず引用文をあげる。

「本素描には、人口減少が人口増加と同様に考察される。財産の平等から生じる人口増加は、財産の不平等から生じる人口減少に比較すれば、その確実性においてより大なるものではない。繁栄と富裕によって国民が遊蕩生活に陥っているようなあらゆる大国において、我々は、人口減少についての不平がつぶやかれるのを日々聞くのである。料理法は悪疫のごとく人口を減少させる、それというのも、料理法が一つの技法になると、普通の10日分に十分相当するものを、一人の胃の腑の中につめこむことになる。料理法は悪疫以上に悪いので、人々は再度活気を取り戻すことは決してないのである。現在のフランスの庶民達は、昔同数の人々が食していた以上の食糧をくっている。同様のことが、イギリスや奢侈が充満している全ての国に、みられる。救治策が提示され実行されている。独身生活は恥とされ、結婚生活が奨励され、子沢山には報賞金が与えられている。でも全て無益だ。農耕を奨励し、奢侈を抑制することこそ唯一の有効な救治策である¹⁾。」

富裕な商業社会の出現を無条件に肯定する樂觀的態度をとるには、当時の大方のインテリゲンチヤは懷疑的であった。周知のウォレス・ヒュームの古代と近代の人口比較論争の背後にあるものは、近代市民社会の順調な発展を展望しうるかどうかが、いってみれば、近代市民

社会の普遍性あるいは「自然性」をどこまで承認しうるかという問題であった。そのために、人間的自然を不変と仮託して、それとフィットする制度や社会をまずは構想してみる。ついで、「経験と観察」でもって、それと歴史的に形成されてきた近代市民社会とを対照する時に近代市民社会をつき動かしている利己心原理をどう評価するのにかよって、各論者の近代市民社会に対する態度は分れる。ケイムズにおいても、近代市民社会の評価は無条件に肯定さるべきものではなかった。市民社会の内包する欠陥は人口減少という具体相において現われるのである。

ケイムズによると、富裕な商業社会における人口減少の原因は、第一に奢侈（アートとしての料理法はその一つの表現であるが）、第二に専制、第三に流通貨幣量の過多、とされている。

奢侈については、勤勉な人々へ食糧が供給されなくなること、女性の出産力が弱体化すること、の二因が指摘されている。専制は、人々を奴隷状態に貶することによって、生殖の欲求と出産力を弱め、さらに勤勉の精神を破壊して、結果として人口減をもたらす。ケイムズは、奢侈よりも専制のもたらす悪影響の方を重視する。奢侈と専制という人類史の展開にみられる否定的カテゴリーは、アダム・ファーガスン等にもみられるごとく、当時の啓蒙思想家達に共通したカテゴリーであった。第三番目の原因である流通貨幣量の過多は、いわば人口についての経済学的知見であり、特有に貨幣論的接近である。かれによると、商業で富裕になる大国の人口減の場合には、流通貨幣量の過剰——労働価格の上昇——製造品価格の上昇——外国市場での販路減——商工業の停滞・他の外国市場への撤退、という経路をへて人口減になる、とみる。この場合人口減を阻止する救済策として挙げられて

1) Henry Home of Kames, *Sketches of The History of Man*, Edinburgh, 1807, vol. 1., P. 88.

いるのは、plough の使用ではなくて、spade の使用を主張していることである。その理由は、後者の方が土地の耕作をより完全に行ない、穀物生産量を増加させ、商工業停滞と外国市場撤退から生じる追加費用を支払うからである。この点については立法（者）は注目に値する、といている。この指摘は、後述するごとく、極めてケイムズ的救済策である。

富裕な商業社会のいわば陥穽としての人口減少への懸念が、実は近代市民社会についての危機意識であることは前述したごとくである。もともと、ケイムズの『人間史素描』の執筆意図はつぎのようなものであった。

「人類はあらゆる見地からみて興味深い主題であり、またあらゆる時代において哲学者達が主に探求したものであった。精神の諸力能が探求され、また心の情動も探求されてきたが、しかしなお、野蛮状態から最高度の文明と改善とへの進歩においての、人類史が欠けているのである²⁾。」

野蛮状態から最高度の文明と改善の状態への人類史の進歩をスケッチすることが、かれの目的である。人類史の中で、奢侈や専制はどのような関連と意味をもつのか、換言すれば、富裕な商業社会は奢侈や専制を必然的に内包しているのか、あるいはそうはならないで永続的に人口が増加していく商業社会への道があるのか、こうしたケイムズ的近代化論を検討する必要がある。当然、かれが使用する奢侈の意味内容、専制の説明等吟味されねばならない。

他方、富裕な商業社会での人口減の「もう一つの原因」とされる流通貨幣量の過剰という問題は、人口の経済学的認識であり、ケイムズの

経済学的知見の全体を知るのに都合がよい。レーマンが提起していたように³⁾、ヒューム、ステュアート、スミス等にならしてどのような関係にあるのか、なにがしかの手掛りを与えてくれるかも知れない。節を変えて、後者の人口の経済学的説明の方から始める。

2. 経済学的説明

ケイムズには経済学といえるような文献ないし記述は極めてとぼしい。経済学的認識あるいは知見は散在しており、レーマンがいうごとく¹⁾、当時の人々がケイムズを「経済学者」ともみていたという指摘は理解できないわけではないが、ステュアートやスミスのような意味で経済学者とは称しえないことは当然である²⁾。ただ「スケッチⅢ」の「商業の起源と進歩」の中に比較的原理的にまとまったものがみられる。

ケイムズによると、社会の最も初期段階においては、人々の欲求充足の形式として物々交換があるが、これには二重の欠陥がある。それは物々交換そのものが持つ形態上の欠陥（欲望の一致と等価交換）と、契約履行上の信約の徳の未確立である。後者は社会的ルールの基礎として道徳的徳目の養成として解決されるが、前者は交換形態の矛盾であるから、この物々交換の内在的矛盾は貨幣の出現によって解決される。そこで貨幣の必然性をつぎのように説明する。

「人の無数の欲望は、あらゆる他の商品との

3) W. Lehmann, *op. cit.*, P. 269.

1) W. Lehmann, *op. cit.*, P. 262.

2) 田中秀夫、「エコノミストとしてのケイムズ卿——ヒューム・タッカー論争とケイムズの経済思想——」甲南経済学論集、27-4、1987年。ケイムズの経済思想そのものを独立に取り扱った邦語論文としては、ほとんど唯一のものであろう。

3) Kames, *Sketches*, vol. 1, P. 101.

2) Kames, *ibid*, P. 1.

交換において喜んで受けとられるような、一般的に尊重されているある商品なしには、容易に充足されるものではない³⁾。」

一般的に尊重されるある商品＝金・銀。ここでは不十分ながらも一般的等価形態の地位に一般商品世界から排除されていく「ある商品」＝貨幣という見解がみられる。貨幣の出現によって、物々交換のもつ形態上のアポリアは直接的には解決されて、今や売買という商品交換の形式になる。もちろん物々交換の内包した価値は売買形式においては外的に商品と貨幣の矛盾的対立として現われてくるのではあるが。そこで売買と商品価格をつぎのように定義する。

「金地金あるいは銀地金が他の諸商品と交換される時、そのような取引は物々交換あるいは交換という通常の名で通る。通貨が交換される時、そのような取引は売買と呼ばれ、そして交換される貨幣は諸財貨の価格と呼ばれる⁴⁾。」

ついで、諸商品の交換を規定する基準、「諸商品の比較価値 (the comparative value of commodities)」, 換言すれば、商品価値の決定の問題にすむ。ここでケイムズは労働価値説を否定するのである。「一ブッシェルの小麦と一オンスの銀とが同一量の労働で生産されるならば、両者は価値において等しくないだろうか」、という労働価値説の命題に対して、つぎの三点にわたって疑問を呈するのである。この命題が成り立つためには、第一に、労働が使用される素材は全て価値において等しいことが必要であるという。その事例としてケイムズは、真鍮の燭台と銀の燭台を製作するのに同量の労働が必要であるが、価値は等しくない、という事例をあげている。ここでのケイムズの思考は、「同一量の労働」を生きた労働 (労働力)＝賃労働者数と観

念しており、生産のために投下され対象化された労働量と解する意識は弱い。したがって、「同一量の労働」を使用しても、ケイムズ的には、同量の賃労働者を雇用しても、銀の燭台が価値が高いから、上の命題は妥当しない、ということになる。しかし、これは、いってみれば、真鍮と銀のそれぞれの産出に要した対象化された労働量 (過去の労働) に差異があるのだから当り前のことである。問題は労働価値説に本質的な労働の二重性の問題が伏在していることであり、かれにこの点の認識が皆無なのは、時代背景を考慮すればごく当然のことであった。第二に、ケイムズは、この命題にはあらゆる労働が価値的には等しいと仮定されているが、実際には労働の価値には差がある、といって批判する。しかし、この批判も単純労働と複雑労働の存在を指摘しているに過ぎない。問題は存在の事実の指摘ではなくて、両者の通約が労働価値説においていかに考えらるべきかである。第三に、ケイムズは、この命題によれば、労働を必要としない物や自然に自生する物にはこの規定は適用されない、しかし実際にはその物も価格を持つ、としてこの命題を批判する。しかし、この「物」の価格は商品経済の価値関係に擬制されて成立した価格のことであって、労働価値説否定の理由にはならない。

このように、ケイムズが掲げている労働価値説命題に対する三つの批判は、理論的にはかなり核心をついた問題点の指摘であるが、かれはそれ以上の考究を放棄して、労働価値説そのものを否定する。抽象された原理的命題にたいして日常普段の事実 (=外観) をつきつけて、一気に原理的命題そのものを否定し放棄する。ケイムズは労働による価値決定を否定して、それに代わって、特に需要面を強調した需給説を呈

4) Kames, *ibid*, P. 103.

示するのである。

「したがって、一般的法則としてつぎのようにいってよい、商業における諸財貨の価値は、財貨の供給量が充足しうるもの以上の需要に依存し、したがって、供給量以上の需要超過に比例して上昇するものである、と⁵⁾。」

この見地から、商品価値の決定はつぎのようになる。

「効用あるいは真正価値 (intrinsic value) がただ考慮すべきならば、鉄1ポンドは金10ポンドにふさわしいだろう。しかし金にたいする供給量以上の需要超過が鉄のそれよりもはるかに大きいので、鉄は市場において金よりも価値が低いのである⁶⁾。」

「こうして一般的にいえば、供給量以上の需要超過が諸商品の商業価値 (mercantile value) を主として決定する基準なのである⁷⁾。」

「後者 (他の諸商品一筆者) の価値は、供給量と需要とに依存する。前者 (金・銀一筆者) の価値は、需要が無制限であるから、供給量のみ依存するし、そして供給量に関してすらも、これらの貴金属は、他の諸商品よりも可変ではないのである⁸⁾。」

商品の真正価値は効用であり、需要の大きさ、つまり欲望の強さに応じて真正価値の大きさが決まる。限界効用価値説の萌芽的説明をここに見ることができる。需給原理にもとづく価値決定も、一般商品と貨幣である金・銀の場合とは異なる。金・銀価値は、その需要の大きさは無限大であるから、もっぱら供給量変化が一般商品よりも少ない、という。ケイズは、この点に、金銀が他の全ての商品価値を尺度する基準

の根拠をみようとする。金銀の生産費こそがこの基準である。流通の外観に執着しての需給説による価値決定の立場を堅持するケイズは、貨幣本質観においても数量説を展開し、われわれはここにヒューム貨幣観の影響を色濃くみることができる。流通貨幣量と市場財貨量との関係から、商品価格の変動を説明し、貨幣価値の変化を説明する。また、商品の需給が均衡している時に、流通貨幣量を変化させた場合の、商品価格や貨幣価値の変化の問題も論じている。

これらを考慮した後に、「流通通貨量の変動によって、インダストリーと商業とがいかに影響をうけるか」と問題を提起するのである。その場合ここで前提になっているのは、数人の賃労働者を雇用した生産者やマニファクチャアによって市場を中心にとり結ばれている商品生産社会である。つぎのような事例が想定される。

「今、高価な油 (貨幣) が、我々のインダストリーや製造業の稼動に十分必要な量ではなくて、それ以下しか供給されないと想定すれば、その必要量の減少はインダストリーや製造業を阻害するにちがいないし、それらは、衰微するにちがいない。我々が生計費を現在の状況に制限しなければ、それはほとんど生じてはいないが、諸外国との貿易差額は、逆になり、金銀の輸出以外にその差額を均衡させるいかなる原資も我々に残さないだろう。そして我々のもとからこれらの金属 (貨幣) が流出し、アートと製造業に別れをつける時、我々は野蛮人の状態に、すなわち、おのおの個人は全ての生活必需品を獲得するためには、自分自身の労働だけに依存しなければならない、という状態に立ち戻ることになるだろう⁹⁾。」

ここでのケイズの思考はつぎのようなもの

5) Kames, *ibid*, P. 107.

6) Kames, *ibid*.

7) Kames, *ibid*.

8) Kames, *ibid*, P. 109.

9) Kames, *ibid*, PP. 114-5.

である。インダストリーと製造業の稼動に必要な貨幣量以下の貨幣量しか流通に存在しない場合には、貨幣数量説の立場から、商品価格は上昇し、労働者の賃金は上げられる。けだし生計費が上昇するからである。そうなると輸出産業の生産コストが上り、外国市場での輸出競争に敗退する。そればかりでなく、逆に輸入が増加し、その結果貿易バランスは逆調になる。したがって、金銀が流出し、技術や製造業は阻害され衰微する。必要量以下の流通通貨量はデフレ効果および、経済活動の停滞・沈下をもたらす。その結果、「分業と交換」の商業社会は、自給自足の「野蛮な状態」に回帰することになる。このようなケイムズの思考には、矛盾や飛躍がみられる。流通必要量説的貨幣観が数量説と異和感なく述べられている。

つぎに、この事例と逆の事例の場合、流通必要量以上に貨幣が存在する場合、前述の富裕な商業社会における人口減の「もう一つの原因」の場合、つぎのような興味深い考察がなされるのである。

「豊富な貨幣は、建築や農耕や製造やその他の充実した改善に努力するために、最もまじめな動機とともに一つの有力な動機をなす。そのような事業項目は人手と材料との二つを必要とするし、その追加の需要によってそれらの価格は上げられる。こうして賃金が上昇した労働者はいまや生活必需品だけでは満足しなくて、便宜品をも要求する。したがってその価格が新しい需要によって上昇する。簡単にいって、貨幣の増加はあらゆる商品価格を上昇させる、それは一つには、貨幣量の増加から、もう一つは、人為的欲求を充足するための追加需要から、である。繁栄する商業の喜ばしい光景はここまでである¹⁰⁾。」

通貨量の増加によるインフレ効果を論じている。それは経済活動を活発にし、貨金を引き上げる。労働者の消費生活は向上し、便宜品への追加の需要が生れる。ちょうど貿易差額が順になる場合の事例である。外国から貨幣的富が流入し、経済活動は活気づき、人々の快楽欲望は刺激され奢侈的需要を生む。あらゆる商品価格が上昇する。ところでケイムズによると、外国からの貨幣的富の流入による流通貨幣量の増大がもたらすメリットはここまでであって、貨幣増加の傾向がさらに進むと、状況は反転して、一転「陰うつな状況」になるというのである。

「ここから陰うつな状況が始まる。国内製品の高価格はわれわれを外国市場からしめ出さだろう、というのは、もし商人が、外国市場で自分の財貨との交換に、なにがしかの利潤とともに国内で支払ったものを得ることができないならば、外国商業を全く放棄しなければならないからである。そして更に陰うつなことには、われわれは自国の市場すらも奪われるだろう、なぜなら、極度の警戒にもかかわらず、わが国の商品よりも安価な外国商品が殺到するだろうからである。最後の光景では、わが国の金銀は奪い取られ、あたかも貿易差額が当初から逆調であったかのような、同様のみじめな状態に立ち戻ることになる¹¹⁾。」

まさに「陰うつな」状況の出現である。国内製品価格の上昇が、輸出市場で他国製品との競争で敗退するだけでなく、廉価な外国商品の殺到によって、貿易差額は逆転し、結果として国内の金銀は流出し、先の必要量以下の貨幣量の場合の経過をたどることになる。

流通貨幣量の過少および過剰の両事例を紹介

10) Kames, *ibid*, P. 115.

11) Kames, *ibid*, P. 116.

したが、両事例の場合とも、賃金の上昇が軸点をなしていた。ただし、賃金上昇のメカニズムは異なるし因果連鎖は逆である。前者（流通貨幣の過少）の場合、商品価格の上昇による生計費の騰貴から労働賃金は上昇せざるをえない。労働者の生活水準の実質的向上とは関係ない。後者（流通貨幣量の過剰）の場合、インフレ効果の初期の好経済環境の結果生じる賃金の上昇であって、労働者の生活水準の向上、消費生活の質の向上を伴う。ただし、この好環境も永続しないで、賃金上昇の結果製品価格がおしなべて騰貴し、外国市場での競争力低下を招く。ここから経済状況は反転する。両事例とも、最終的には、外国市場から敗退し、さらに国内市場をも外国に支配される。国内の生産者や製造業者の経済活気は萎縮し衰微して、自給自足の「野蛮状態」に退化してしまうことになる。そうすれば、外国市場を確保し、人口減に至らないような経済環境を維持していくためには、どうすべきであろうか。

インフレ初期の好経済状態を持続させること、換言すれば、賃金と製品価格、特に輸出製品価格の上昇を抑え、インダストリーと製造業の持続的發展を図るために、ケイズはつぎのような政策を呈示するのである。

第一に、賃金上昇を抑制するために、一方において、農業の生産力をあげて、食料品価格の低廉をはかることであり、他方において、労働者 (hand-labour) 数を十分に確保することである。前者は農耕 (husbandry) にインダストリーや製造業の沈滞の打開策をみていたケイズの立場からは当然である。後者はいわば「産業予備軍」の提唱である。ケイズによると、スペイン凋落の因として、膨大な金銀が新大陸から流入したにもかかわらず、過剰な人手が存在し

なかったので、貴金属の流入が製造業の発展に結びつかず、かえって賃金と製品価格の上昇をもたらし、外国市場から敗退し、ついで国内市場も外国製品に支配されて、国民の生活必需品すらも外国に依存するみじめな状態になった、とされている。

第二に、貿易バランスの均衡に留意することである。貿易バランスが大幅にあるいは永続的に順になる場合、あるいは逆になる場合、ともに先に検討した流通貨幣量の過剰・過少の事例に相当し、結果はともに「陰うつな」状況に陥った。もともと貿易バランスは、「神の手 (hand of Provident)」によって保持されているのだから、どちらか一方に傾くということは許されないものであって、全ての国民が生活のあらゆる愉楽にあずかるものであった。したがって、人にはこうした貿易・通商バランスの均衡という神の計画を実現し保持するための義務があると、ケイズはいうのである。

第三に、公庫に貨幣を退蔵することによって、流通貨幣量の過剰を解決する。ただし、この場合、誰れが公庫の管理をするかが問題であるという。

第四に、ケイズは金銀の輸出禁止の愚行性を指摘する。ヒューム的地金の国際的自由移動の立場からの主張である。

第五に、適度の輸出奨励金の承認である。「適度の輸出奨励金は、国内の労働の価格と原材料の価格の上昇を均衡させ、外国市場を開いておくだろう¹²⁾。」ケイズによると、オランダはこの政策を無視したので、全ての製造業を失った。この場合、「適度の (proper)」というのが重要なのであって、過大な奨励金は貿易バランスを失速させる。「適度の」奨励金政策によって、外

12) Kames, *ibid*, P. 124.

国市場を確保しつづけることが眼目なのである。ケイムズは、穀物輸出奨励金は農耕を奨励し、それは多くの人手を必要とすること、国内の穀物価格を低下させること、この二点から、人口増にとって有益であるとする。これにたいして、牛輸出奨励金は、牧畜を奨励するが、それは人手を余り必要としないこと、牛の輸出は国内の牛価格を上昇させ、かつ人口増に阻害的であるから、否定するのである。

最後に、銀行による通貨量の調節の主張である。ケイムズによると、銀行は商業にとって有益であり、イングストリーを刺激するものであるが、他面、賃金と製品価格を上げるともいう。貨幣量が乏しい国においては、銀行は通貨量を増加させ、イングストリーと製造業とを促進する。他方、商業の拡大にとって貨幣量が十分に存在している国においては、銀行は手形割引を通じて商人に手持現金を融通し、外国貿易を阻害しないようにするものである。ここでケイムズは通貨の供給過剰におちいらないために、銀行は通貨供給を真正手形の割引にだけ限定すべきことを主張する。

以上、六項目の方策が、富裕な商業社会の陥穽としての人口減の「もう一つの原因」であった流通貨幣量の過剰を抑止するものとして呈示された。ついで、われわれは、こうしたケイムズの経済学的知見をいくらか考察してみる必要がある。

1750年以降の経済学文献は、現実分析や経済理論において、スミスの経済学体系の形成にとって直接に先立つものであった。なかでも、52年のD・ヒュームの『政治論集』は、たしかに経済学の体系性という点では劣るものの、重商主義末期の政治・経済問題についての哲学的原理と歴史的背景とを十分に感じさせるような

深みのある分析・評論であった。特に、人口論争と貨幣論争とは当時の中心的経済問題をなし、人口問題および商工業に与える貨幣量増減の問題は、ともに重商主義思想と密接に関係した問題であった。ケイムズの経済学的知見にもこの両者をかれなりに統一的に理解しようとする姿がみられる。小林昇教授によると¹³⁾、これらの論争はヒューム説を出発点にし（最も別個にはそれぞれ先鞭者がいたが）——J・ステュアート——J・タッカー——F・ケネー——A・ヤング——スミス、と一巡するにつれて論点は広がり認識は深まって、スミスによる市民経済学体系の成立として実を結ぶことになった。ケイムズはこの間の事情を精通していたと思われる¹⁴⁾。例えばヒュームとタッカーの論争はケイムズが双方の草稿を仲介したといわれている。かれは、幅広く多方面に考察の目を向け、自分なりの見地を確定しようとした人であるが、もともと法学プロパーの人であり、またその点にかれの真骨頂があり、プライオリティがあった。したがって、かれの経済学的知見にはヒュームその他の人々の見解のくり返しがみられるのは当たり前かも知れない。特にヒュームの貨幣観はケイムズに大きく影響を与えている。貨幣数量説、正貨の国際的自由移動説、連続的影響説にみられる貨幣量増減をめぐる問題等、ほとんどヒューム説のくり返ししの観がするが、他方ヒュームとは違って、商品価値の決定の問題にふみこんで、労働価値説を否定しいわば限界効用価値説に近い、あるいはその萌芽的な説明をなしている。この間のケイムズの思考は、競争の外観を説明しうる原理を、日常の経済現象をそのまま

13) 小林昇、『経済学の形成時代』未来社、1961年、序説。同、『小林昇経済学史著作集』1, pp.15-23。

14) 小林昇、『形成時代』, 109頁。『著作集』1, p.85。

表象した常識にストレートに立脚させていることである。いわばコモンセンス学派的特徴をみることができる。さらに、価値規定における労働価値説の否定によって、それにかわって需要が強調されたり、製造品価格は、その構成の大部分も賃金が占め、したがって、賃金財の大方をなす食料品の価格水準が決定的であるから、農耕を重視するという考えのなかには、一部には、ステュアート的要素が、それとは確定できないが、みられる。特にケイムズにおいては、農業にたいして特有の思い入れがみられる¹⁵⁾。

流通貨幣量増減の問題、外国市場喪失の恐怖感、貿易差額の均衡の保持の強調と警戒、穀物を中心とした輸出奨励金の承認等、思野は流通に限定されて重商主義の思考をなしているが、国内外の流通の統制策の背後には、経済バランス (the commercial balance) が神の計画として神の御手によってもともと保持されていると主張する。スミスの見えざる手を想起させる。したがって、人は神の計画を実現すべく努力することが義務でありまた利益である、という。スミスとの関連でいえば、流通必要量以上に銀行が通貨供給の愚をおかさないために、真正手形の割引にのみ割引業務を限定せよという主張の中にみることができる。

総じて、ケイムズの経済学的知見は二次的で説明不足の感はまぬがれないが、これも当然といえば当然のことであり、また価値論の分野で、ヒュームやステュアートやスミスとは異なった

認識をみることができる、ということであろう。ついで、われわれは富裕な商業社会の人口減の因である奢侈と専制を検討する必要がある。

3. 奢侈と専制

ケイムズの奢侈にたいする厳しい姿勢をつぎの引用文から読みとることができる。

「しかし不幸にも奢侈が広がっているところでは、無辜の人が罰をうけることになる。…同時に奢侈は人口の大敵であって、生計費を上げ、また多くの人々を独身生活に引きこもらせてしまう¹⁾。」

「奢侈はとりわけ商業状態において有害である。中庸の人は小利潤で満足するが、大利潤を回収する部門以外のあらゆる交易部門を軽蔑する奢侈の人にとっては、そうではない²⁾。」

「全ての時代において、奢侈は、それが広まった場合、あらゆる国家を破滅させてきた。諸民族はもともと貧しく雄々しいものである。かれらは前進してインダストリーを起こし、商業をなし、そして恐らく、征服を始め帝国を打立てる。しかし、この状態は永続はしない、なぜなら、大きな富が、怠惰・好色・汚職・売春・破滅への扉を大きく開くからである³⁾。」

われわれは、マンデヴィルが奢侈を有効需要の観点から弁護したこと、ヒュームが悪い奢侈と無辜な奢侈とを区別し、後者を国民的産業の繁栄のために支持したこと、ステュアートが奢侈の中で国民の活力を減退させ生産力を低下させるような奢侈は除外しつつも、外国貿易段階では否定してはいるが、幼稚貿易および国内商

15) ケイムズは、農業こそ人間性に最も適した仕事であり、紳士の仕事にふさわしいと主張して、その利点を三点あげる。第一に、農業は適度の運動であること、第二に、農業に伴う期待と心配の種とが精神をいつも目ざめさせ活気づけること、第三に、私利と公利の結合において農業に勝るものはない、全てのジェントルマン農業者は愛国者である、(Kames, *The Gentleman Farmer*, Edinburgh, 1776. PP. XV -XVI.)。

1) *Sketches*, vol. 1, P. 522.

2) *ibid*, P. 523.

3) *ibid*, P. 524.

業段階では市民の奢侈を奨励していること、を知っている。ここでは、奢侈——有効需要増——雇用増の経済的效果から、また怠惰・好色・汚職といった個人的悪徳に傾斜しないイノセントな奢侈は、人類史の洗練化・文明化の表現であると理解され、承認されている。こうした現実主義的態度とは対照的に、ケイムズをはじめスコットランド啓蒙を支えた人々の中では、アダム・ファergusンやウィリアム・ロバートソン、ヒュー・ブレアー等の公共の徳にたいする私人の徳目としてのクリスチャン・ストイシズムの観点からの奢侈にたいする厳しい態度をみることができる⁴⁾。

ケイムズが「富裕な商業社会」の人口減の原因としてあげた奢侈は、勤勉な人々から食料をとり去るということと、人の活力を奪い生殖力を減退させるということ、の二つであった。後者はケイムズ流の歴史的事実の指摘として一応承認するとすれば、前者の意味はどういうことであろうか。ここでケイムズの頭の中にあるのは、奢侈の風が社会各層にまで広まると、華美・飽食・浪費があらわれ、結局勤勉な労働貧民がそのツケを負わされるということである。生計費の上昇——労働貧民の生活苦——救貧制度への逃避——怠惰な人々の増加。他方、商業精神が退廃し、堅実な産業活動が軽視され、投機的な大利潤を見込める投資部門にしか投資しないから、他の堅実な部門は外国商人に支配されてしまう。こうした中産的商工業階層の投機的態度の助長と、労働者階層の貧困化による救貧制度への依存性、この二つの要因は、結局、インダストリーと商業の衰退をもたらし、ひいては国家の破滅にいたる、というケイムズの思考の

流れをみることができる。

他方、専制についてはつぎのようにいっている。

「あらゆる統治のうちで、民主制はもっとも騒々しいものであり、専制は精神的力能を麻痺させ行動動機を弛緩させるのであって、民主制の対極にあるものである⁵⁾」

「真に定義された自由国家とは、厳格に自然法に支持されている場合の、また、社会改善のためおよび誠実と勤勉を促進するために、あらゆる国内条例が考案されている場合の国家のことである。もしこの定義が正しいならば、専制は最も悪い統治である、なぜならば、それは自然法あるいは社会的善をなんら考慮することもなく、主権者の恣意的意志を支持するために考案されているからである⁶⁾。」

「最も洗練された諸国家が専制によって人口を減少させた。ギリシャ・エジプト・小アジアをみよ⁷⁾。」

専制は、人を奴隷状態に落魄させることによって、生産的活動への意欲を喪失させて精神的力能、活力を麻痺・弛緩させ、生き生きした生命力を減退させて人口減をひきおこす。ケイムズは、「富裕な商業社会」の人口減の原因としては、先述の奢侈よりも専制は悪影響をもつと指弾している。もともとケイムズの統治論には、レーマンが指適するように⁸⁾、人口、社会状態、風土によって統治形態は規定され、周知の君主制、貴族制、共和制、およびそれらの変種としての寡頭制、民主制、暴民制の形態が論じられている。これらの形態の中でケイムズが理想とした統治形態は、一種の制限君主制あるい

5) *Sketches*, vol. II, P. 61.

6) *ibid.*, P. 66.

7) *ibid.*, P. 69.

8) W. Lehmann, *op. cit.*, P. 259.

4) Richard B. Sher, *Church and University in the Scottish Enlightenment*, Princeton, 1985, P. 180.

は共和制であった、とレーマンは解している。当時の大方の人々が君主制、貴族制、民主制の、いわば良き部分を統合した混合制、現実にはイギリスの立憲君主制を支持した立場とほぼ共通していると思われるが、より共和主義的でシヴィック的立場である。特に、生活様式や富裕の発展度（生産力の高さ）といった経済的要因が、統治形態に大きな影響力をもつとみたことである。国家の権力・形態・機能は経済の発展段階によって規定されると同時に、生産力の増大は国家や社会の道徳的基礎を変質・墮落させるとして、経済的発展に伴う進歩と退歩のアンビヴァレントな性格を指摘している。

ケイムズは、奢侈と専制による人口減少と社会の衰退からの回復、また奢侈と利己心によって愛国心を喪失した国民の没落からの回復にたいして極めて悲観的な言辞しか与えていない。前者に対しては、その国民が死滅する以外には回復の道はありえない、とし、後者に対しては、貧窮化以外には道はない、と主張する。こうした悲観的展望はかれの人類史の理解に裏づけられているのである。したがって、われわれはケイムズが人類史をどのように理解していたのか、また近代市民社会の展望をいかにみていたのか、これを検討することにする。

4. 小 括

ケイムズは『人間史素描』の中で人類史の発展をどのように描いたのであろうか。

「最初の人種主義者¹⁾」ケイムズは、人種・民族・国民の多様性を、風土のような外的環境の差異のせいとみるよりも、創造主の意図である

とみて、各民族・国民の気質や才能といった内的形質を重視し、モンテスキューの風土説やビュフォンの単一人種説を批判する。したがって、ケイムズは、多様性の中の斉一性を認識することが、人間研究の特徴とみて、種々の民族の成熟への進歩の過程を描こうとするのである。レーマンは、『人間史素描』がビューム、ロバートソン、ファergusンなどの歴史書の類いのものではないが、問題としてのテーマへの接近は極めて歴史的方法をとっているとし、しかもその方法は更に、歴史的資料に裏づけられたいわば実証的な厳密に歴史的アプローチと、「思索的理論的歴史アプローチまたは自然進化論的アプローチ」とに分けられるとする²⁾。そして野蛮状態から最高度の文明状態への人類の進歩史の中に、逆の墮落・退歩の姿をみるという、いわば進歩と退歩の斗争の視点が歴史方法論の一要素をなしている。ミークは周知の4段階論の発展の上でケイムズの中に「決して小さくない進歩」をみている³⁾。

ケイムズによると、人間は本来貯蔵する動物であり、所有感覚は人間の内部感覚のうちの特別な感覚である。もともと人間は自己のものと汝のものとを区別する。いわば所有感覚のアプリオリな先行性が指摘されている⁴⁾。この感覚を前提として、労働や技術によって獲得された物は労働した者に帰属し、私有財産となるのであって、こうして私有財産の神聖性が主張されている。ところで、人間の財産感情には勤勉

2) Lehmann, *op. cit.*, P. 185.

3) R. L. Meek, *Social Science and Ignoble Savage*, Cambridge U. P., 1976, P. 102.

ケイムズは、狩猟・牧畜・農業・商業の発展段階論があてはまるのは旧世界の温帯地方においてのみであって、熱帯・寒帯の両地方においては、後者が牧畜段階で止まり、前者には狩猟・牧畜の証しはなく、人は当初から、植物性食物を食べていた、と述べている。(Sketches, vol. 1, PP. 78-80.)

1) Gladys Bryson, *Man and Society*, Princeton 1945, P. 66.

と貪欲の矛盾した二面があつて、前者は進歩・人口増に、後者は奢侈・人口減につながる。この二面性の指摘は第一編「社会から独立した人間進歩」の各論を貫徹している。インダストリー、製造業、商業の発展、富裕の増大につれて、いわばケイムズの生産力契機の表現であるアートが有用な技術と美術とに分けて論じられ、ついで、習俗論において、それと富裕との関係が4段階論に沿って説明されている。この習俗論はケイムズ的生産関係論の契機を表現しているものと思われる。アートと習俗の歴史的発展の叙述を通して、野蛮から文明への人間の進歩が辿られ、市民社会の成熟状態において人間的形質の完成をみるというものである。ところで、ケイムズの思考はここでも二面的である、所有感覚・利己心・勤勉・市民社会という思考と、所有感覚・利己心・貪欲・奢侈・墮落という思考とが画然としている。両思考を対比すると、所有感覚・利己心までは同様であるから、貪欲・奢侈こそが成熟した市民社会を実現できるか否かのポイントであることになる。先述したごとく、奢侈に対するケイムズの厳しい批判の根拠

をここにみることができるのである。

第一編「社会から独立した人間進歩」が、歴史発展段階論を思考を導く概念として使用しつつ、いってみれば、ケイムズの横に歴史的な市民社会形成論を論じたものにたいして、第二編「社会の中の人間進歩」においては、市民社会は論理的に前提されて、人間の社会的価値意識の成熟が、いわば縦に構成的に論じられている。そこを貫ぬいている社会的価値意識とは公共の徳としての愛国心のことであつて、その起源と進歩とが追求される。

ケイムズによると、人間には本来社会結合の欲求が存在し、その欲求は適度の大きい社会形成に限定されているものという。つまり、社会結合とは、良き統治のため、人間的諸能力の改善のため、あらゆる人間的徳行を鼓舞するために適合したものでなければならないからである。したがって、人類全体という普遍的大いさをもった社会（その国家としての帝国形成）は、もともと人間性に合致しないものとして、また更には、実践道徳としての、人類愛といった、ハチスンの普遍的仁愛という徳も否定される。つまり、人間の社会結合欲求は民族社会・国民国家の形成を志向する、とされているのである。こうして形成された民族間には商業と戦争を通じての交流によって、吸収と反発の力学が貫ぬくとともに、民族内においてはセクトと党争の問題が生じる。人口・経済的水準・風土といった民族の内的外的諸契機によって、民族国家の出現とその形態とが規定されることになる。われわれが興味あるのは、ケイムズが国家形成および政府形態の展開を、貨幣導入以前と導入後とに分けて論じていることである。このように、ケイムズは第二編では、抽象化された次元での人間に本能的な社会結合欲求論からはじめて、

4) 労働に先行して、人間は所有感覚(sense of property)をもつ、というケイムズの主張は、一貫していたように思われる、というよりも早期の見地であった。例えば、1751年の『道徳および自然宗教の諸原理』においてヒューム所有論に反対してつぎのようにいつている。「われわれは、いかなる種類のとりきめやコンヴェンションにも先立って、所有の觀念をもつ。すなわち、所有は一の自然原理に基づくものであるし、また所有の侵害は良心の呵責と義務不履行の感覚とを伴うものである、と。」(*Essays on the Principles of Morality and Natural Religion*, Edinburgh, 1751, facsimile reprint by University Microfilms International, 1986, P. 104.) また財の共同所有・共同消費の不自然についても触れている。「共有財の享受は少なからず不自然で不快なものであろう、というのも、人間には顕著な専有性向があるからであり、また財の共有は社会にとって必要ではない、若干の珍らしい場合には行なわれるかも知れないとしても。」(*Historical Law Tracts*, Edinburgh, 1758, fourth edition, 1792, P. 89.)

政府形態論まで展開するが、その構成論的展開において貫徹している赤い糸は、富裕と愛国心の関係である。シヴィック・モラリストのケイムズといってよいだろう。結局、ここでも、ケイムズは富裕は愛国心を窒息させる傾向があるという基本的認識を示すのである。インダストリー・マニュファクチュア・コマーシの発展といった「富裕な商業社会」、つまり市民社会の成熟においては、愛国心は衰微・消失せざるをえない。このアポリアを解消するための具体策として、租税政策、軍事改革案、救貧制度改革案、

大都市（ロンドン）分割案等を呈示する⁵⁾。こうした制度改革案とともに、市民社会における個人の実践道徳論が第三編「諸科学の進歩」において主として論じられる。いわばケイムズは、制度と精神の両面から、市民社会の成熟した状態の実現を意図せんとしたのである。

5) 軍事改革論については、篠原久「スコットランド民兵論とアダム・スミス」(『アダム・スミスと常識哲学』、有斐閣、1986、第5章)を、救貧法・制度については、田中秀夫、前掲論文、参照。